1

思慮に富んだ改革志向の教育者が望むのは、生徒自身が問題を解決し、批判的に物事を考え、効果的に情報のやり取りをし、他者とうまく協力することである。こうした一連の行為を行うには、事実を暗記するよりもずっと多くの複雑な学びの方法をとらなくてはならない。私たちの教育制度は多くの場合、記憶することが学びだと勘違いしているが、何かを暗記したからといって、それを理解していることにはならないし、その内容の使い道を知っているとは限らない。生徒に情報を与え、覚えた事柄についてのテストを行ったからといって、それが生産的に共同作業を行ったり、複雑な課題に取り組んだりする機会となるわけではない。情報を受け取り、それを暗記しても、生徒は学びに参加しているとは言えないのである。例えば，学校の成績や試験で有名大学に入学する条件を満たす高得点を見事にとっている高校生は、大学に入学すると数学や化学を避けてしまうことが多々ある。そうした生徒によれば、自分たちは、実際には理解していないが、完成さえすれば良い手順として、公式やアルゴリズムを覚えるのは得意であり、そうした暗記能力に比べて数学や化学を概念的に理解する力は劣っているということである。

2

本書は言うならば、高齢化に関する社会福祉プラクティスについて米国で最も尊敬される教育者により書かれた、権威ある実用的ガイドである。ごく最近の最も緻密な研究と理論を通じて、高齢者社会福祉プラクティスの基礎を学んだり、教えたりしたいと考える読者には大いに推薦したい一冊である。読者は、高齢者へのプラクティスに関して次々と展開される新しい研究結果を見ることで、老年学社会福祉プラクティスに存在する高揚感をも本書全体から感じることができるだろう。「高齢者が個々に抱える困難を特定するのみならず、そのニーズを満たす支援を見つけ出すことにおいて、社会福祉士が重要な役割を果たす機会は多岐にわたる」(p. 359)。高齢化の現場は高齢者のニーズの移り変わりと共に進化するため、本書も今後の改訂が必要となる。次の改訂版の出版を待つ間、この第4版は、高齢化福祉プラクティスに関する最良のリソースとなることであろう。